

ほっかいどうの本

北海道新聞 2011年6月19日(日)

(12)面

本書は日本の言語学と民族学の學問的成熟に計り知れない影響を及ぼした天才学者・知里真志保博士の内面に迫る意欲的論考である。著者の佐藤＝ロスベアグ・ナナ氏は、主に文学とのかかわりから博士の全体像へ迫ろうとする。特に興味深いのが氏独自の問題意識である。

氏は知里博士のアイヌ文学翻訳において「ポキポキ」のような擬音語の使用が顕著である点に特に注目する。言語学者として異言語間の翻訳の困難性を熟知し、むしろアイヌ語の日本語からの「異化」に心を碎いていたかにもみえる博士が、翻訳に際しては一種親しみやすいスタイルをあえて選択したのはなぜかを氏は問題とする。

Translating Culture
Creative Translations of Ayru Chanted Myths by Masahiko Chiri

文化を翻訳する
知里真志保のアイヌ神話訳における創造



佐藤＝ロスベアグ・ナナ
Masayo Sato-Rosberg

サッポロ書店

(サッポロ堂書店
2100円)

文化を翻訳する 佐藤＝ロスベアグ・ナナ著

遺稿や蔵書などからの証拠に基づいた上で、氏は折口信夫からの強い影響を指摘する。折口の示唆によって、アイヌ文学の中に古代のシャマンによる託宣や演劇を伴う祭祀の名残をみた博士は、翻訳する際、シャマンの所作を想起しやすい擬音語をあえて多用することによって「原作」により忠実たらんとしたのではないか、と推理する。

極めて興味深い仮説であり、博士の学問を理解する上で重要な視点を提供するものであろう。ちなみに私は知里博士の説に必ずしも同意しないが、本書により博士の学説への理解を深めることができたことは幸いであった。

いわゆる横文字語の多用、考察と予備説明とのアンバランス、注の不備など、気になる点もあるが、本書は知里博士研究の新たな段階を示す優れた業績である。広く一読をお勧めしたい。

(佐藤知二) 北大大学院文学研究科教授